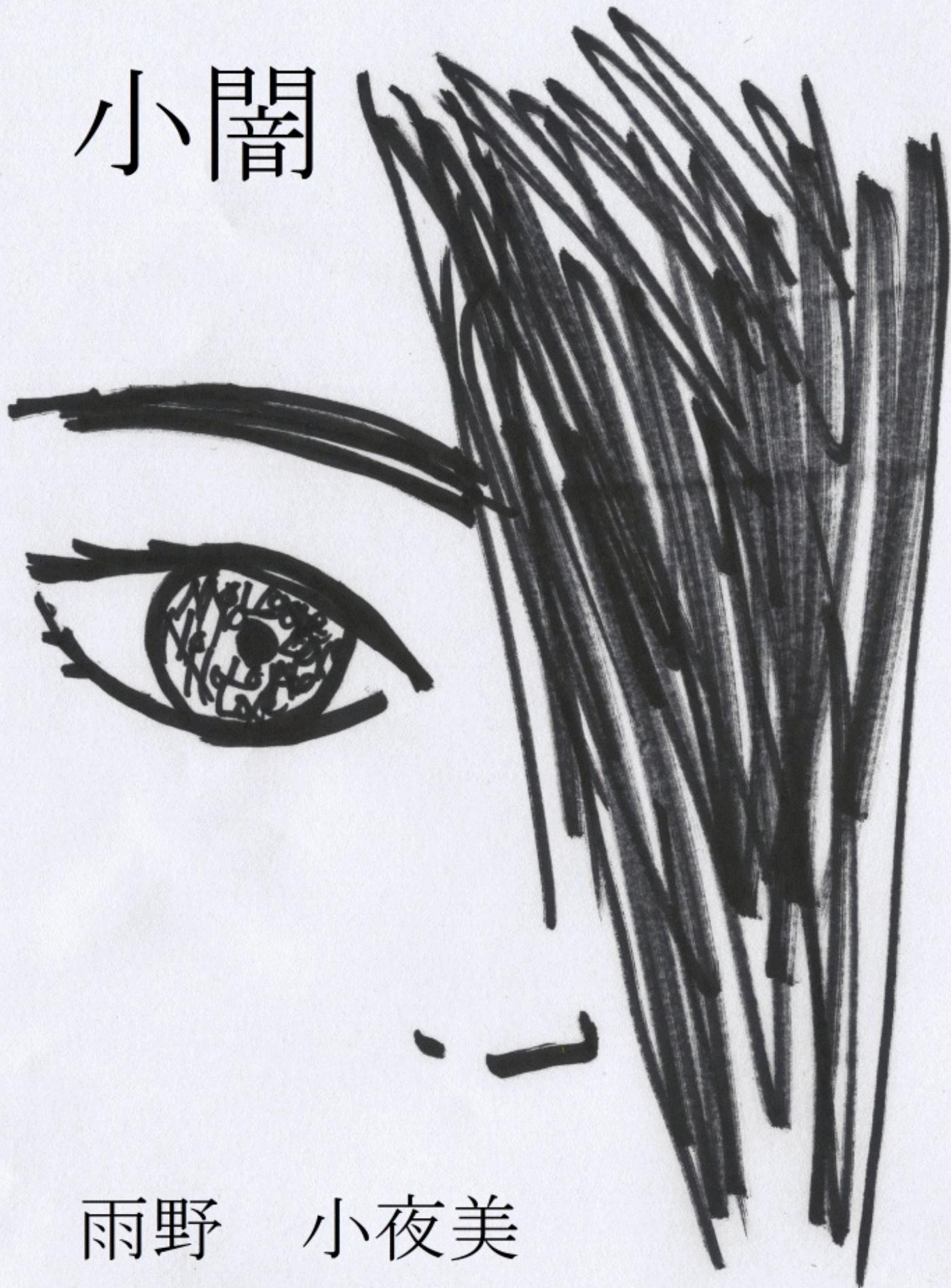


小闇



雨野 小夜美

(あめの こやみ)

逃亡記

虹色のテイル

時計の声

宝箱

ラララ

透過光

月と孤独

天井 カツ丼 親子丼

ハードコア畑の人

Before After You

海のララバイ

逃亡記

コンビニのドアを開けたら
外がやけに暗くなっていた

私のオレンジの自転車は
小雨の中で倒れていた

竜巻なんて見たことないけど
思いながら自転車を起こした

なんとなく汚れた匂いがして
かごにヨーグルトと夕飯の袋つめた

遠くで雷の音がきこえる
まあ近所だから大丈夫と思った

見たこともない風が吹いている
後ろから雷が追いかけてきた

走りながら急に怖くなってきて
雨に守ってもらおうとした

地上で光が飛ぶように鳴った
目を伏せてずぶ濡れでこいでいた

青い屋根がちょっとのぞいて
やっと逃げられるんだなって思った

ちっちゃなささやかな逃亡記
袋をつかんで自転車を捨てて走った

ドアを開けたそのとき
目の前がカッと光った

天に昇るような衝撃音
白の中で目を閉じた

目を開けたら玄関

「おかえり」

あなたのくれた 光だった

虹色のテイル

苦しさの中に花火を見つけたんだ／何だよ 輝きやがって／静寂の中に笑い声／蚊帳の外の歌口ずさむ／どいつもこいつも／バカがバカをバカにしてる／スーパー台風より深刻な問題だ／地球のスピードが凄過ぎる／これじゃそろそろ振り落とされてしまうなって／モンキーとバナナの関係／必死につかまっている／クモの巣のせいで／どんどん速くなっていく地球のスピード／口にガムテープ貼ってる奴が賢い時代／本当は息が出来なかった事／今更気付いたのさ／笑ってくれよ／出来るだろう／お前の舌は右にしか動かないから／バカがバカをバカにしてる／実に深刻だ／苦しさで吐きそうな時／花火を見つけたんだ／聞こえるのは音だけ／輝くのは心の一瞬だけ／なんて祈ったらいいかわからないや／傷つきたくない／実は飛行機って動いてないんだぜ／地球がお好きな風に動いてんだよ／毎日人が落ちていくのを／爆笑しながらみてる／クモの巣に囚われて息が出来ない／わるいひとたちがむこうにはたくさんいるんだよ／結局ネットも人もネットだろう／人はクモの巣を作る生き物だ／地球が2次関数にのって点Aから点B／もうわからねえよ／苦しさの中で花火を見つけたんだ／お前に話しても無駄だろ／何だよ あいつら／群れて輝きやがって／カーテンを開けたら／心の中が広がってる／つかまるのもヤバくなってきた／まだ落ちねえよ／寝落ちするだけ／苦しさの中に花火を見つけたんだ／空しさの中に花火を見つけたんだ／何だよ あいつら／心の闇の中で／ひたすら輝きやがって／喋れるけど言葉が出ねえんだよ／よい子とよい親は9時に寝なさい／傷つきたくない／何だよ あいつら／闇の中に絵を描きやがって／消えてくれない小さな絵を

時計の声

「まずは 顔を上げろよ
涙をぬぐって
外の景色でも見たらいい
あんまりいい景色じゃないけどな

お前は『無駄に酸素を消費してしまった』って
きっと後悔しているだろう
でも今 呼吸をしていなかったら 後になってもっと後悔するだろう」

夜のような 朝
人間関係は ほどけないこま結び
今日もあの人に会うんだな
誰と会っても 孤独からまりあって

「どんな状況にあったって 誰も助けても 心配してもくれないのは
お前が十分に強いから 心配をする必要が無いから」

鍵閉めてたったひとりになって 寝不足でどうしようもなくなって
ノートにとっても読めない文字を書き殴って
置き時計に語りかけていたんだ
これは その時計の声

「何の意味も無い一日なんて無いんだ
呼吸をする事に意味があるんだ」
真っ白で真っ黒な時計 始まりのアラームが鳴る
「『起きるの嫌だ』って思っただろう
きっと そう思っただろう？
朝なのに真っ暗な一日の始まりだ
起きろよ 着替えろよ 堂々と会いに行けよ 負けんなよ」

宝箱

欲しいものが全て 手に入るわけじゃない
いらぬものが全て もらえないわけじゃない

永久に空の宝箱
いくつ物を入れたって 空の宝箱
ネックレスやサファイア あと思い出の写真
思いつく限りの宝を入れたって ぶちまけたって
空のまんまの 宝箱

「永久に空のままの 宝箱が欲しい」
クレヨンで 歪んだカレンダーを描きながら
小さい頃 ある冬 ふと雪のように願ったんだ
サンタも仏様も親も信じない子どもだった
ピアノで 一生懸命 不協和音鳴らしてた

大切なもの 宝箱に入れた
身の回りのもの 金や学歴や名誉まで 入れてしまった
笑顔だけ 大きすぎて入らなかった

どんなものを入れたって
空のまま
ずっと そんな宝箱を夢に見ていた
テストの裏に落書きして
いらぬものを手に入れば
欲しいものまで手に入るとってしまった

暗い部屋で ブログを見てる
今日も自分しか見てないブログ

飲みかけで 投げ棄てたコーヒー

この命と 引きかえに
永久に空の宝箱をもらった
それで よかったんだ

永久に空だから 探し続けられるから
毎日確かめるんだ 何ひとつ入ってないって

ラララ

外国からCDが送られてくるんだなあ
一体どうやって送られてくるんだろう？
きっとカプセルか何かに入れるんだな

ポケモンのでかいボールみたいなのにに入ったCD
太平洋を 波に乗って どんぶらこ どんぶらこ
海で洗濯していた 郵便屋のおばあさんが
「ホトケさんがあがったぞ」って
すまん もうやめとくわ
ラララ～ララ～ララ～ラ ラララ～ アー
ウォウオーオ～♪

外国からCDが送られてくるんだよ
実はカリブ海 通ってたりして
海賊に奪われたら適当な言い訳メールがきそう

「すみませんでした。
ご購入されたCDは、きっとフードファイターが食ってしまったに違いない。誰だ、ピザの中に
CDとゴキブリを入れたのは。大変、遺憾だ」
ララララララ～イエ～ヤイヤイヤ～ア～ア～
アアア～アアア～

外国からCDが送られてくるんだよ
ポケモンのボールなら大きいやつがいい
そして 僕とCD 太平洋を風に乗って どんぶらこ どんぶらこ
雲みたいにさ
海で洗濯していた 郵便屋のおばあさんが「 」
すまん
チャララ～ラララララ～エ～アアア～ララ～ララ♪ララララララ～
ヘイエ～イエ～アア～♪ ウォー♪

透過光

光は
いつもガラス越しから
僕を見ている
ガラスを通っている時点で
もう元の光ではないんだろうけど
僕を
励まそうとしているんだなあ

どんなに生活的なものでも
光があたるとファンタジーになるんだよ
色がよみがえってゆくよ
まばたきしたくないと思って 目をつむってしまうくらい

光は
何も差別しないんだよ
ヒトも枕も昨日のコーヒーも僕の心も
同じように照らすよ
天の国っていうものがあるなら きっと何の差別もないところだろう

カーテンにはばまれて きゅうくつそうにしてる
ガラス越しの光
虚しさにはばまれて きゅうくつそうにしてる僕を
光は
励まそうとしているんだなあ
宇宙をまっすぐに走ってきてまで
僕を 下を向いて歩く やる気のない人々を
励まそうとしているんだなあ

もう元の光でもないのに
部屋の中に花畑が生まれたよ
まばたきしたくないよ 目をつむってしまうよ

月と孤独

ベールの向こうから 人間の笑い声を見ていた

この世で

本当に孤独を知ってるのは 月だけなんだよ

人間は 優しくない

月があんなに優しいのは

孤独の意味を 知っているから

月は僕が生まれる前から ずっと孤独で

きっとこれからも ずっと孤独なんだろうな

まるで僕のように

月に問いかけるよ

「僕は月の鏡なんじゃないか」って

顔をあげると

時計が延々と時を刻むという 日課をこなしていて

きっと時計も

僕と同じ気分にいるだろうなって

人間はいくら話したところで 孤独の意味なんかわからない

人の間で暮らしているから

僕はもう人間じゃなくて 人なんだよね

月も時計も見えない涙を 孤独というんだ

月が

あんなに優しいのは

人々の孤独を 痛いほど全部受け止めてきたから

その理論によれば

僕や時計もきっと優しいのだけど

優しくしようにも 手の中には誰も誰も いないんだ

天井
カツ丼
親子丼

天井が言いました

「カツ丼は油だらけ 健康に悪そうだ
親子丼はなんて 残酷な名前なんだ」

カツ丼が言いました

「カツ丼の良さがわからないなんて 不幸な事だよ
天井はエビが臭い 親子丼なんて 食べても全然エネルギーにならない」

親子丼が言いました

「親子丼は油っぽくないから おいしいわよ」

天井が言いました

「いちばんおいしいのは 天井だろ
カツ丼と親子丼なんて 雑巾を食っているみたいだ」

カツ丼が言いました

「何言ってるんだよ おいしいのはカツ丼に決まってるさ
天井と親子丼こそ雑巾だろ」

親子丼が言いました

「わかりあえないなら それでいいじゃない
たとえ同じ道を歩こうとしたって
歩けないのが当然なんだから」

天井とカツ丼が言いました

「正論だ」

親子丼が言いました

「わたしなんか何もわかってないわ
でも嫌でもこれだけはわかるのよ」

「天井はぜいたくな感じがして好きだわ
カツ丼はボリュームがあっておいしいわ
わたしは自分で言うのも何だけど
あっさりしてておいしいわ
なんておいしい雑巾なの」

わかりあえなくても みんなすてきな雑巾なんだから
それでいいじゃない
同じ道を歩こうとしたって
同じ道なんて無いわ

ハードコア畑の人

汗ばむような 残暑厳しい 昼に近い朝
白い泡が 飛んでいく
保健の先生に ノートをわたそうとして
体育教官室の前に 立っていた

光は六角形
ここって怖い先生多いんだよな
恐る恐る ドアを開けた 汗をぬぐった

重く白い空気
似たような顔の先生が 3人いた
パールをあふれ輝くような 頭で

どうしよう 見分けがつかない
心の中に描いた 残像さえ 怪しくなって
悟られまいと
ある先生に声をかけたんだ 自信なさげに震える声

「保健の先生は どこにいらっしゃいますか」
「お前 なめとんのか」
もう 分かったでしょう

ハードコア畑の 真ん中にただ立っていて 夢を見たんだ
いつか絶える緑を見わたして
湿った砂が手になじんで
私は ここから 拾われたのかって思う

ハードコア畑と知らずに 踏みこんで
両親は私を「かわいい」と思って 拾ってきたのでしょうか
何畑でも 許してね

育ててくれて ありちゃん

Before After You

これまでも これからも
きっとあの日も

逢うたびに君は
きれいになっていくなあ
僕は寝ぐせを放置してるだけなのに

いつものサンダルにミニスカート
いつの間にか高いヒールの靴に変わってる
昨日付き合い始めたと思ってた
もう3年になるんだね

爪に変な飾りがついてるのが嫌だった
いつの間にか淡いピンクに変わってる
もう僕ら未成年じゃないんだね
メール送った夜が昨日の事みたい

これまでも これからも
君を理解するなんて
海の中で人魚を探すみたいで
大人になっても
君はきれいになっていくだろう
螺旋を描いて

僕は誰が何の服を着てたかなんて
あんまり覚えてないけど
君がきれいになっていく
それだけはわかるよ

これまでも これからも 君

海のララバイ

貝を閉じている

貝を閉じている

スシの具になるのはやだな

たぶんそうなのでも ずっと閉じている

真っ暗な場所で目覚めて

真っ暗な場所でゴロゴロ過ごして

真っ暗な場所で 今日も眠るんだろな

午後十時 海のララバイが ひびく

貝を閉じている

貝を閉じている

僕は ただのでき損ないのホタテ

誰か思い出せない

誰かと友達になろうとして

その腕をちぎってしまったから

貝で挟んだら あまりにも簡単に

それは海に投げたよ

腕より 自分の方が怖かった 見たくなかった

貝を閉じている

貝を閉じている

もう何も見たくないから

傷つけたくないから 傷つきたくないから

貝を閉じている

貝を閉じている

誰かのノックが貝がらにひびく

絶対に開けない

「ごめんね」

もう寝る時間なのに 誰の声だろう？

「ごめんね 貝を開けてよ
貝を開けてよ
あのときの ヤドカリだよ」
誰だよ それ
「見たくないかもしれないけれど
左腕のない ヤドカリだよ」

逆に気になって
ちょっと貝を開けた
イヤだ こんな現実じゃない...

すかさずヤドカリが 貝がらに右腕をかけた

「これが現実だよ あたしは片腕のないヤドカリ
一度は本当に土をいじるほど 君を嫌いになったよ
でもホタテ君はあたしと友達になりたかったんでしょ
そんなに強く貝で挟んでまで
ごめんね」

貝のすき間から ヤドカリの手 海のララバイが入ってくる
海の夜風が 入ってくる
「もう こんな時間だから 迷惑だから
君のとなりで寝ていいかな」

いいよ って答えた
「ありがとう」

どうして断れるだろう
「ごめんね」なんて言うなよ
「ありがとう」なんて言うなよ

パールのような夜
初めて見た夜
午後十時 海のララバイが ひびく

小闇

<http://p.booklog.jp/book/109014>

著者：雨野 小夜美

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tinycolor/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109014>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109014>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ